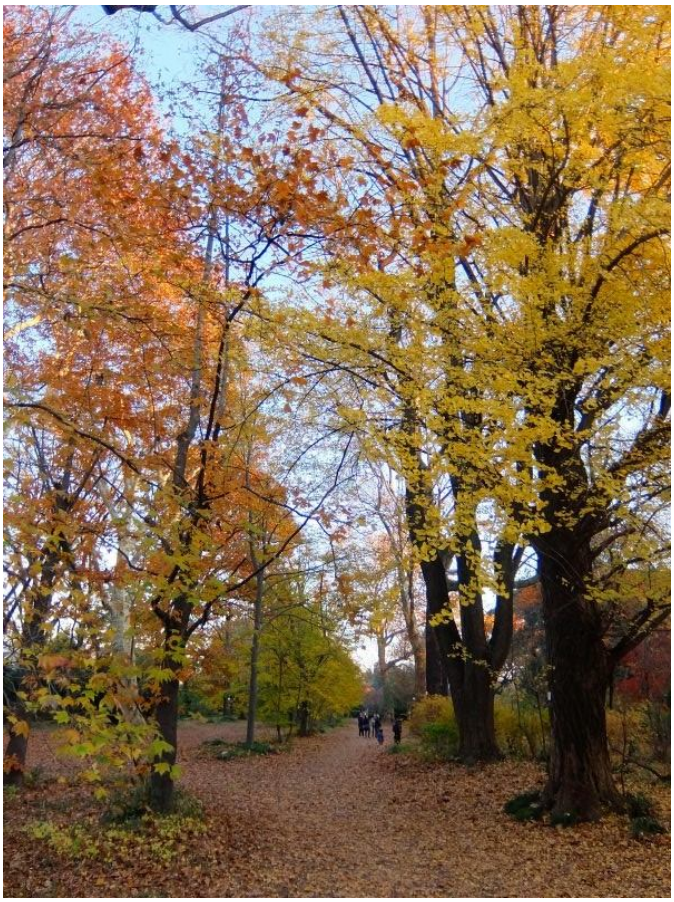
「日々の理科」（第 1261 号） 2017（H29）,12,19

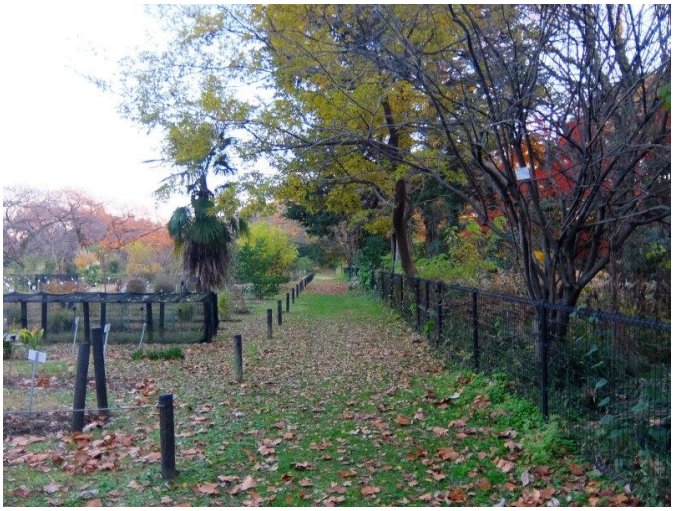
「晩秋の小石川植物園（８）」

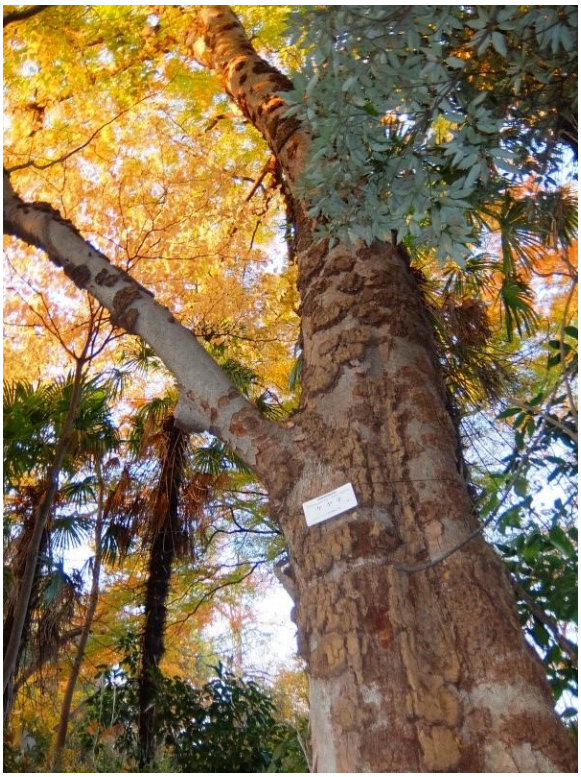
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

私は何だか退園してしまうのが惜しくなって、もう一度スズカケの森のほうに戻ってみた。ちょうど、植物園の一番奥にある「サルスベリ並木」のほうから戻ってきたスケッチの一団が帰るところだった。

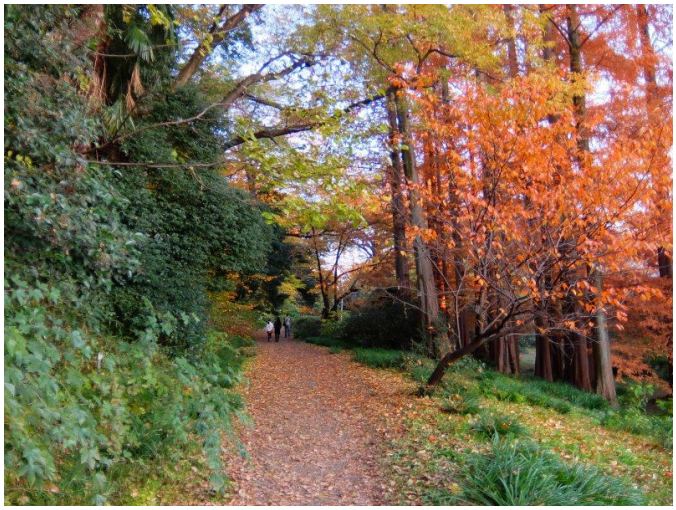


再び薬草園の脇の道を通って、正門に向かった。この道は、まさしく「武蔵野台地」の縁にあたるところで、海進時は海が見える高台だったはずだ。





最後に段丘崖を下りようとすると、ケヤキの古木に出会った。ケヤキの樹皮といえば灰褐色で、ブナ科の植物（たとえばコナラやクヌギ）に比べるとずっと平滑である。しかし、このケヤキの樹皮はものすごい。まるでコルクガシのように樹皮が厚く剥がれて、モザイク状になっている。この古木の生命に影響はないのだろうか？



比高十数メートルの段丘崖を下り、崖下の道を正門に向かった。私の予想（説）では、この法面は人工的なものではなく、武蔵野台地と東京低地（浸食谷）の間の「中位段丘面」である。写真の左側が段丘崖の急斜面、右のゆるやかな斜面が、中位-下位段丘崖ということになろう。

都会地の地形考と、晩秋の武蔵野台地の自然を堪能できた、なかなか実りある日曜の午後だった。